

「日本ハンドボール協会創立 75 周年記念誌」(抜粋)

財団法人日本ハンドボール協会監修

II 都道府県協会の歩み

岩手 P. 45~46

若手指導者台頭

新設されて間もない不来方高校に赴任した阿部伸は、創部 3 年目の 1991 (平 3) 年に男子を全国選抜大会に出場させ、1995 (平 7) 年には谷藤勝美率いる高校総体 9 連覇中の盛岡一高を破り初優勝し、念願のインターハイ出場を果たしている。その勢いに乗る不来方高の 3 連覇を阻止したのは谷藤節雄率いる盛岡三高であった。谷藤は 1997 (平 9) 年の全国選抜大会に初出場し、インターハイでベスト 8、国体でも少年男子岩手選抜の監督に就き 5 位入賞を果たすなど指導力を発揮した。阿部の転勤に伴い不来方高の指導者となったのは、阿部の教え子の内記徹であった。内記は不来方高を県内はもとより東北でも敵なし、全国で強豪の仲間入りするチームに育て上げた。1998 (平 10) 年から 14 連覇中である不来方高のライバルとなったのは、齋藤崇率いる盛岡南高であった。齋藤はインターハイ予選、全国選抜予選決勝で幾度となく不来方高と死闘を演じ悔し涙を流した。盛岡南高は、2004 (平 16) 年第 27 回全国選抜大会に初出場し、2 回目出場の第 29 回大会では、3 回戦で藤代紫水と激戦を繰り広げ惜しくも敗れはしたが、岩手は不来方高だけではないことを全国にアピールした。

女子では、盛岡二高が 1985 (昭 60) 年から 2002 (平 14) まで、小友正人、中島昭博、小田島隆信と引き継がれ、18 連覇を成し遂げている。2003 (平 15) 年にその盛岡二高にストップをかけたのが、小川至門が監督を務める不来方高であった。その後、負け知らずで、2011 (平 23) 年まで 9 連覇を果たしている。2011 (平 23) 年 7 月本県花巻市で開催されたインターハイに、外館由美子率いる盛岡白百合学園高が念願の初出場を果たし、2012 (平 24) 年 3 月の全国高校選抜大会には、工藤里花率いる盛岡南高が初出場を果たした。

中学校は、岩手選抜監督の菊地正道、大沢勝、前中体連専門部委員長の岩角聖孝、現専門部委員長の佐藤正輝、強化委員長の中野達也、酒井めぐみ、上飯坂徹、今川晋、中野奈穂美、佐々木歩らが雰囲気の良い専門部を形成し、一致団結して強化、普及に努めている。

大学では、2003 (平 15) 年に富士大学男子監督に樋下孔士、2005 (平 17) 年に教職を定年退職した小友正人が女子監督に就き、東北学生のトップチームに君臨しチーム強化を図るとともに、県内外に門戸を広げ、中学校から一般チームに至るまで会場を提供し指導にあたっている。

全国大会入賞

1992 (平 4) 年、全国選抜大会で小友正人率いる盛岡二高が 3 位入賞を果たし、久々の全国大会入賞をもたらした。小友は、1998 (平 10) 年に神奈川国体少年女子で盛岡二高を中心に盛岡南高、黒沢尻南高 (現北上翔南高) からなる岩手選抜を 3 位入賞に導いている。

2002（平 14）年には、中学校男子岩手選抜が第 10 回 JOC ジュニアオリンピック大会で県勢初の全国大会 3 位入賞を成し遂げた。菊地正道監督、工藤眞理子、中野達也、鈴木幸子のスタッフで、混成チームを上手くまとめ上げ、悲願達成となった。2006（平 18）年は、中野奈穂美率いる松園中男子が第 35 回全国中学校大会で 3 位入賞に輝いた。2010（平 22）年、第 19 回 JOC 大会で、大沢勝監督、佐藤正輝、佐々木歩、中野達也のスタッフで、男子岩手選抜が県勢 2 度目の 3 位入賞を果たした。

同年、第 37 回全国高等専門学校選手権大会で根津辰行監督、谷川富男がコーチを務める一関高専が準優勝に輝いている。

高校男子では、内記徹率いる不来方高が 2003（平 15）年度第 27 回全国選抜大会で県勢初の 3 位入賞を果たす。その後、選抜大会、インターハイ、国体で 7 回の 3 位入賞を果たし、全国上位の常連となる。岩手県開催最後の全国選抜大会（2011 年度・平 23・第 35 回大会）では決勝進出の快挙を成し遂げたが、悲願の初優勝は惜しくもお預けとなった。

祝賀会・周年事業

1998（平 10）年に当時本協会長箱崎敬吉が勲四等瑞宝章を受章し、盛岡グランドホテルで藤原哲夫県体育協会長をはじめ多くの来賓関係者にご参集いただき祝賀会を盛大に開催した。2009（平 21）年 9 月には、盛岡市内ホテルにて関係者約 200 名の出席を賜り本県協会創立 60 周年記念式典が盛大に催された。

スポーツ少年団の誕生

1992（平 4）年に長野たづ子、長野和樹夫妻が県内初となるリトル・ハンドの名でスポーツ少年団を結成した。その後、安倍富士男、安倍恭子夫妻に引き継がれている。次いで、1996（平 8）年に菅原秀行監督の花巻クラブジュニアが結成され、2002（平 14）年には工藤眞理子が監督を務める矢巾フェニックスが誕生し県内 3 チームとなり、県外チームとも盛んに交流を深め、普及と技術向上に努めている。

全国大会開催

1979（昭 54）年に本県花巻市で初の日本リーグを開催し、1985（昭 60）年からは毎年開催し多くの観客に足を運んでいただいている。1999（平 11）年に盛岡市で開催された岩手インターハイに出場したのは、男子は不来方高、盛岡一高、女子は盛岡二高、初出場の長野和樹監督率いる盛岡南高であった。不来方高、盛岡一高、盛岡二高がベスト 8 に進出し、盛岡南高は初出場ながら 3 回戦まで進出し、大会を盛り上げた。この大会に専門委員長として尽力したのが小笠原忠芳であった。

2004（平 16）年、全国マスターズ大会を開催し、花巻市での全国大会誘致の気運が高まった。2010（平 22）年から 3 年間全国高校選抜大会を開催し、2011（平 23）年に北東北 7 月インターハイ、同年 11 月に全日本学生選手権大会を開催した。高体連専門委員長の中島

昭博が中心となって準備し、県協会関係舎、花巻市の協力によって、成功裡に終えることができた。

全日本プレーヤー

ソニー九州所属の長野かづさ（松園中、名古屋短大附属高出身）と北國銀行所属の上町史織（上田中、盛岡二高出身）が日本代表選手としてアジア大会、世界選手権に出場し、活躍している。

審判の活躍

大沢由和・佐藤陸朗ペアが全国優秀ペアに選ばれ、全国大会、日本リーグ、全日本総合で活躍したのに続き、中舘豊・多田和生ペアが全国優秀ペアとなり、全国大会、全日本総合で数々の決勝を吹笛するなど高い評価を得て、後進の良き模範となった。

訃報

本協会の生みの親で、名誉会長の箱崎敬吉が2010（平22）年8月、翌年7月に本協会元会長の小田島實が逝去された。

2 巡目国体に向けて

2011（平23）年3月の東日本大震災で、多くの犠牲者、被災者を出した本県にとって、4年後の2016（平28）年岩手国体を開催するか否かは大きな問題となった。復旧、復興を優先させようとする県と、開催を主張する競技団体で意見が分かれた。日本体育協会と県、県と市町村・競技団体等で多くの意見交換が持たれ、開催に消極的だった県知事が県民の総意として開催することとしたのは12月だった。県の方針は、企業、団体、ボランティア等の参画を促進し、県民等との協働を基本とする、開かれた「新しい岩手型国体」の実現を目指すこととしている。

本協会としては、ただ開催するのではなく、従来为国体と同じように開催県として優勝を目指して取り組む方針である。しかし、強化費の捻出、選手の確保、強化方針の確立等、課題は山積している。ここを協会が一枚岩となり、皆で智恵を出し合いながら乗り越え、国体成功に繋げていきたいと思う。

【理事長 岡市 武】

IV 国際大会・国内大会の歴史

全国高校選抜大会 P.157～159

高校界に2つ目の全国大会が「選抜」の名で誕生したのは1978(昭和53)年3月である。

高校スポーツの全国大会は1954年4月20日付の文部事務次官通達により「年1回程度にとどめる」とされ、夏の大会だけで過ぎてきた。それが1969年7月3日付で発表の「児童、生徒の運動競技の基準」(通達)で、より現実的な路線が敷かれ、「地方ブロック大会及び全国大会の回数は各競技について各年2回とする」と“緩和”された。

これを受けて、各スポーツは、「第2の全国大会」の開催を急ぎ、ボールゲームではバレーボールが1970年に、バスケットボールが71年に、それぞれ「選抜」をスタートさせた。

高校ハンドボール界の指導者と選手たちは、他競技が、選抜大会として新しい全国イベントを「華々しく開催している」のを尻目にしながらも、早急にハンドボールも開催してくださいと「熱烈」に待ち続けた。人気種目の球技は、「国立競技場、花園、東京体育館、代々木第2体育館」がそれぞれのフランチャイズとして固定され、憧れの大きな目標としている。

ハンドボールの現場からは、如何にも羨ましい限りだった。日本協会、高体連役員も他競技に遅れまいと必死だったと思う。当時の日本協会の副会長は徳永陸繁氏で高体連の部長を兼務し、副部長の島田新太郎、伊藤和夫、清水氏などの各委員もいずれも日本協会の理事で「高体連の執行部」であったため、高体連と日本協会間の調整はスムーズに進められた。

問題は会場だったと思うが、名古屋では幾多のビッグイベントを企画、運営した伊藤和夫氏が引き受けてくださった。そうして念願だった春の高校選抜が誕生したのである。2回大会も名古屋で開催され、第3回は山口県の希望で徳山市総合スポーツセンターを中心に開かれた。それから第18回大会を山口県徳山市で開催されたほかは第21回までの19回はすべて愛知県体育館で行われた。「春は名古屋で」の合い言葉が定着していったのは、今では懐かしくなったが、この時代だったのである。

その後、開催に立候補する県もあって、話し合いの中で決定され、第22回と23回は大阪、24回から26回までは富山県氷見市、そして、神奈川県、茨城県、東京では馴染みの駒沢体育館で開催された。以後、31・32回は徳島県、33～35回は岩手県花巻市(34回は東日本大震災のため中止となった)で開催された。

日本協会創立75周年にあたる2013年の第36回は静岡県で開催される予定となっている。ここに至るまでは、試行錯誤の繰り返しで、第1回から第3回までは9ブロック代表9チームと開催県1チームの10チームで争う方式だったが、あまりに少な過ぎるため観客動員もなく、寂しい限りの大会だった。参加校は大会を追うごとに増加している。特にチーム数の多い、愛知、東京、大阪は、第5回から、さらに10回からチーム数増加の著しい神奈川県に単独で出場権を与えた。第5回から、北海道を南北に分け、出場枠を2校にした。全国高等学校総合体育大会上位に2枠を与えたり、各ブロック選考会参加を都道府県代表

2校として、実力のある県から複数の出場を可能にするなど、選抜大会独特の方法を考慮し、実行に移した。

特に、花巻大会では、観客も多くなり、ファンがハンドボールに精通してきて拍手を送るタイミング等も実に見事だった。岩手県のハンドボール関係者、特にこの大会を企画、運営している役員のハンドボールに対する素晴らしい熱意を感じる。岩手は新たに完成した会場を郷土の特長を十分に生かし、垂れ幕や横断幕なども整然と色彩豊かにバランスを考えて創り上げた。「音」でも、応援団などスタンドの配置も良く整理され、その雰囲気の中では、必然的にマナーも良くなり、以前は「場にそぐわない」音や言葉が聞こえたが、整然たる館内では、自然淘汰されていくことを感じさせられた。会場を創り、運営している人たちの感覚はこの大会に限らず、今後のハンドボール・イベントに新風を吹き込むものだった。

然して、肝心の普及、強化双方ともに大飛躍を遂げたとは言えそうもない。技術、戦術などについては、平均して大きく向上をみることができた。特にワンマンテクニックについては、20年前とは格段の差があると確信できる。シュート技術も、その場面に応じた技術を多くの選手が的確に身につけていた。パスにしても「基礎のパスから複雑なより高度な」パス技術も多く見られた。また、戦法にしても同様に攻守にわたり高度化された大きな進歩を遂げていると言える。しかし、以上は強化というより普及の範疇で世界に通じる強化とは、少し異なるのではないかと感じる。多くのテクニシャンは見られるようになったが、昔の「オリンピックに出場していた時代」によくみられた「誰が見ても」将来は絶対に「全日本に入る」だろうと思わせる「傑出した選手」があまり見当たらなくなった。どうしてそうなったのかは、明確な分析はできないが、大会が1，2年生となると、どうしても先を急ぎ、短期間で選手づくりをするため、基礎練習を十分に練習できずに、応用に入らざるを得ない。その点、春の全国大会は無理が生ずるのではないかと考える。普及を考慮に入れると春季でも十分に目的は果たせたが、強化という視点からは、段階的な指導の必要性もあり、発育・発達など、多くの要因からみても、冬季に移行すると、より効果的ではないかと考える。一考を要する課題である。

日本協会としては、NTSと高校チーム内での強化と同時進行を取ることだが、一般論として高校生を強化するには、大会を目標とする方法が最も重要な部分であることはいうまでもない。この大会は、日本協会の主催であり、共催をマスメディア関係にお願いして全国規模のテレビや新聞報道に拡大していく必要がある。一般の人たちの目をハンドボールに向けることも期待できる絶好のチャンスである。人気スポーツ競技と肩を並べる日を熱い思いで待ちたいと思う。

【川上整司】

目次

◇口絵

◇祝辞

- 刊行の挨拶 渡邊佳英（日本ハンドボール協会会長）
祝辞 田中眞紀子（文部科学大臣）
祝辞 張 富士夫（日本体育協会会長）
祝辞 竹田恆和（日本オリンピック委員会会長）
祝辞 Dr. Hassan Moustafa（国際ハンドボール連盟会長）
祝辞 Sheikh Ahmad Al-Fahad Al-Sabah（アジアハンドボール連盟会長）
祝辞 Dr. Hyung-kyun Chung（東アジアハンドボール連盟会長）

◇ハンドボール年表

I 日本協会各年度の動き

伝来期（1922－1930年）	胎動期（1931－1937年）	草創期（1938－1944年）
復興期（1945－1955年）	発展期（1956－1961年）	国際期（1962－1975年）
激動期（1976－1996年）	1997（平成9）年度	1998（平成10）年度
1999（平成11）年度	2000（平成12）年度	2001（平成13）年度
2002（平成14）年度	2003（平成15）年度	2004（平成16）年度
2005（平成17）年度	2006（平成18）年度	2007（平成19）年度
2008（平成20）年度	2009（平成21）年度	2010（平成22）年度
2011（平成23）年度		

II 都道府県協会の歩み

北海道、青森、岩手、宮城、秋田、山形、福島、・・・・・・・・・・沖縄

III 日本協会加盟団体・専門委員会の活動

全日本社会人ハンドボール連盟	全日本学生ハンドボール連盟
全国高体連ハンドボール専門部	全国高専ハンドボール専門部
日本中体連ハンドボール専門部	日本車椅子ハンドボール連盟
機関誌委員会	審判委員会
女性委員会	全国小学生大会と小学生委員会
マスターズハンドボール	がんばれハンドボール20万人会
学校体育ハンドボール検討専門委員会	公認スポーツ指導者制度
コーチング研究会	N T S（ナショナル・トレーニング・システム）

医・科学委員会
ビーチ競技委員会

アンチ・ドーピング

IV 国際大会・国内大会の歴史

日本が参加する6大国際大会 球史を彩る「全日本選手権」「全国大会」の歩み
時代の風を受けた大会・団体

V 特別インタビュー／座談会

記念企画 パイオニア和田旬功さんに聞く

座談会 I 1970年代の日本のハンドボール

(木野実、近森克彦、野田清、本田洋、氷海正行、佐々木健一)

座談会 II 80年代以降の日本のハンドボールの推移

(津川昭、蒲生晴明、松井幸嗣、田口隆)

座談会 III 100周年への「希望」を語る

(青戸あかね、櫛田亮介、久保弘毅)

座談会 IV 「新たなる歴史」に向かって

(市原則之、川上憲太、佐分正典、福地賢介)

VI 世界・日本ハンドボール界、その時々

大谷武一論 (大西武三)

日本ハンドボール協会の誕生 (編集委員会)

ヨーロッパでの発展 (村松誠)

戦中。練習なき、試合なき日々 (萩原一次)

戦中。歴史の灯守った女子界 (編集委員会)

「関東学生リーグ」の開幕 (萩原一次)

「関西学生リーグ」の発足 (中江義雄)

関西学生界、草創のころ (編集委員会)

競技ルールの変遷史 (村松誠)

女子実業団黄金期の思い出 (池田二三恵)

日本ハンドボール (男子) の技術・戦術の変遷 (蒲生晴明)

「情報力」活かす総合戦力の確立を (水上一)

日本女子ハンドボール界の歩み (井薫)

日本男子ハンドボールのターニングポイント (平岡秀雄)

世界の舞台へ (レフェリー育成に取り組んで) (安藤純光)

学校体育とハンドボール (角紘昭)

「日本リーグ」発足までの曲折 (編集委員会)

日本ビーチハンドボール (本間誠章)

男子世界選手権・熊本大会 (井薫)

スポーツ仲裁裁判所での参考人としての聴聞（藤本元）
国際ハンドボール連盟（IHF）学校ハンドボールプロジェクトについて（山田永子）
宮崎大輔の功績（久保弘毅）
田中美音子の功績（村井暁子）
「ドイツへのきっかけ」とその選手生活（内林絵美）
ハンドボール文献（専門書）総ざらい（川上整司）
世界のハンドボール、現状と将来（渡邊佳英）

◇「日本ハンドボール史（日本ハンドボール協会 50 周年記念誌）」からの復刻

全国高体連ハンドボール部誕生の周辺（徳永陸繁）
国際ハンドボール連盟への復帰（外山准二）
電撃的だったアジア連盟の発足（荒川清美）
モスクワ・オリンピック断念の日（竹野泰昭）

◇特別レポート：“5つの歴史”その背景を探る（杉山茂）

◇特別企画：思い出の一こま

VII 名簿編

日本協会役員、表彰者・功労者、審判員（国際・A級）、公認コーチ

VIII 記録編

◇国内大会

全日本総合選手権／日本リーグ／国民体育大会／ジャパンオープントーナメント／全日本実業団選手権～全日本社会人選手権／全国実業団トーナメント～実業団チャレンジ～社会人チャレンジ／全日本学生選手権／全日本高校選手権／全国高校選抜大会／全国高等専門学校選手権／全国中学校大会／JOCジュニアオリンピックカップ／春の全国中学生選手権／全国小学生大会／全国クラブ選手権／全日本教職員選手権

◇国際大会・試合

オリンピック（男女）／ユースオリンピック（男女）／オリンピックアジア予選（男女）

／世界選手権（男女）／世界選手権アジア予選（男女）／アジア大会（男女）／アジア

選手権（男女）／世界ジュニア選手権（男女）／アジアジュニア選手権（男女）／世界

ユース選手権（男女）／アジアユース選手権（男女）／世界学生選手権（男女）／その

他の主な国際大会・試合／ビーチ競技

日本代表国別公式対戦成績／男子日本代表公式国際試合出場ベスト 50／女子日本代表公式国際試合出場ベスト 50

IX 資料編

競技人口、IHF加盟国

日本協会規約（1938年、現行）

「日本ハンドボール史」（日本ハンドボール協会50周年記念誌）目次

「日本ハンドボール協会創立60周年記念誌」目次

編集後記